

M-Nav iプログラム「地域活性化プロジェクト」に参加した明治大学生22人が、9月1～2日、日南町を訪れました。学生らは町内を巡り、農業体験や田舎体験などを体感した後、「日南町の活性化」について町内の地域の代表や町職員と意見交換会を開き、その際、大学生は4チームに分かれ、視察をもとにそれぞれに活性化への提言を発表しました。その中で優秀作となった提言をここに掲載いたします。

最先端をゆく日南町

『チームA』 政治経済学部2年 安部浩平
 法学部 4年 古高菜美
 商学部 3年 角田貴大
 農学部 3年 柴崎雄一朗

日南町は、人口に占める65歳以上の割合を表す高齢化率が45パーセントを越え、日本の30年先をゆく町と言われている。人口減少時代に突入した日本の未来はこの先どうなっていくのか。将来に不安を抱く若者も少なくない。地方の疲弊が進む昨今、地域を活性化するにはどうすればいいのだろうか。また、そのために自分たちにできることは何かないのだろうか。そんな思いを持った学生達が集まり、今回のプロジェクトの一環として9月初旬日南町を訪れた。

私たちは「地域活性化」について研究している学生ではないし、日南町のような山間地に来るのも初めてという人も多かった。普段都会に住み慣れている私たちが、日南町が直面している現状を実際に目の当たりにし、それを踏まえただであくまで私たち学生目線で、日南町を活性化するにはどうすればいいかを考えてみた。

私たちがまず考えたのは「日南町に若者を呼び込むにはどうすればいいか」ということだ。

実際に日南町を回ってみると、本当に若者の姿がない。それもそのはずで日南町には高校がなく、若者が働く場所も探

日南町に若者を呼び込むにはどうすればいいか

すのは困難だと言う。しかし、近隣市町村に目を向ければ、例えば米子市などには若者は沢山いる。そういった若者をターゲットにして何かできることはないだろうか。

日南病院を訪問した際に、高見院長が提唱している先進地域医療というものを知ることが出来た。

これは「町は大きなホスピタル」というコンセプトのもと、医療と福祉の垣根をなくし、生活自立障害を持つ人を支える地域の力を構築・向上させるというものだ。高齢化社会に対応した医療として、また27年間連続黒字という経営実績を誇るという点からも全国から高い評価を受け注目されている。「日南町の高齢化は日本の30年先を行っているのだから、医療も30年先のものでなければならぬ」と高見院長は仰っていた。

日南病院ではそうした最先端の先進地域医療を学ぼうという医学生や研修医の受け入れを行っている。つまり若者が日南町で学びたいと思っ来ていて、という事実が実際にあるということだ。

この取り組みをもっと町全体を巻き込んだ大きなものにできないだろうか。



先進地域医療の体験という日南町でしかできないことを医学生だけでなく、文系・理系を問わず広く他学部の学生などの若者にも対象を広げて売り込む。それとセットにして農業体験や地域の方との交流の場を設けるのも良いと思う。医学生は医療を学ぶために来るが、日南病院がやっていることは決して医療だけに留まるものではないし、福祉やボランティア、農業体験などに興味を持つ若者も少なくないはずである。

日本の将来を背負っていく若者が最先端の地域医療を体験するというのはとても意義があるだろう。先進地域医療は地域そのものが対象であるために、医学生だけでなく、若者を呼び込む契機となり得るのではないだろうか。

M・Nav iプログラム「地域活性化プロジェクト」で
日南町を訪れた明治大学生による「日南町の活性化」への提言、第2回。

アイデア勝負で地域活性化

明治大学
『チーム
松竹梅』

商学 部 1年 細野 裕介
政治経済学部 4年 竹内 雄治
文学 部 3年 加瀬 優
国際日本学部 3年 松田 俊介

私たちは日南町に滞在し、農業体験と共に地域の現状や地域活性化の取り組みについて勉強しました。日南町は急激な高齢化が進展しており、農家の後継者問題に加え、近くに大学や就職先がないため20代の若者が不足しています。その結果、町に活気がなくなってしまうという現状にあります。そこで私たちなりにどうすれば若者を呼べるのか、地域活性化ができるのか、ということを考えてみました。

初日のトマト農園でのトマトの収穫体験では、地元の農家のかたのやさしさや親しみやすさを感じると共に、日南町トマト独特の甘さ、新鮮さに感動しました。古民家「かつみや」での地元の食材を利用した郷土料理、古くからある建築物で学ぶ郷土の歴史には地域の風土や自然と共生しており、伝統の重みを感じました。

これらの経験はどれも素晴らしいのですが、若者を町に呼び込むためには、これだけでは不十分であると私たちは考えました。同じく過疎化が進んでいる福井県の鯖江市では、大学生の創作活動を提供することによって若者を呼び込むことに成功しました。鯖江市の環境も特別良いとは言えず、創作場所の近辺には、トイレが神社の中しか

不便を生かす…逆転の発想

ないという不便な環境にもかかわらず学生が集まります。つまり学生は多少環境が悪くてもきちんとした目的があれば、あえて辛い体験をしにやってくるという逆転の発想です。この逆転の発想を生かした視点から以下のようなことを提案したいと思います。

私たちは滞在中の移動手段としてバスを利用しました。日南町の道は自動車を利用しなければいけないような大変険しいものでありましたが、その険しい道をあえて歩くことによって健康を促進する「ダイエツツアア」として企画に結びつけるなど、逆に活用できるのではないかと考えました。また、町の空いている体育館や運動場などの施設を活用し、学生のサークル活動やゼミの合宿施設として安く提供する代わりに、町の地域活性化イベントのスタンプとして参加してもらうといったことが考えられます。100kmマラソンが高齢化による人員不足によって中止となってしまうましたが、毎年学生に来てもらうことで、仕事の引き継ぎを学生同士で行えば係の人の負担を減らすことができます。このような工夫でイベントを復活させることにつながると思います。

この企画を実行に移すには、学生誘



致のため大学と行政との連携、バスなどの交通手段の提供、大人数を受け入れ可能な宿泊施設の充実・環境整備が必要で。さらに、イベント達成には行政だけでなく地域の方達との連携が大切です。効率よく業務を行うために参加者同士の情報の伝達がスムーズでなくてはなりません。私たちが感じた住民の方々の温かいおもてなしや心使いがあれば、学生と地域住民との連携もたやすいはず。この企画を通して、普段交流のない人たちが集まることでイベントを成功させること以外に、地域住民とのふれあいや同じ目的意識をもった仲間が協力しあうことの大切さを感じてほしいと思っています。

通勤農業

私たち「チーム二十世紀梨」は、日南町に「通勤農業」を提案します。通勤農業とは、文字通り通勤して農業をすることを意味します。

現在、日南町では過疎化、農業の後継者不足、労働者不足が深刻化しています。それらを解決する方策の一つとして、私たちのチームが考えた「通勤農業」があります。具体的には、労働力が不足している農家の方に、お手伝いのかたちとして、農業をしたいという方を紹介します。たとえば、日南町は、米子市から一時間ほどで行くことが可能です。平日は米子市の会社で働く会社員の方が、休日は日南町で農業をするというモデルが考えられます。また、収穫などの農繁期だけ農業を手伝うという、これまでになかったような農業スタイルが可能になります。

この「通勤農業」は、農業に興味がある、やってみたいという、農業に対して意欲がある方と過疎化で悩む農家のニーズをマッチングできる可能性を持ちます。今日では、「エコ」ブームの影響を受けて、農業に対して関心が高まりつつあります。また、中国残留農業の影響を受けて、自分の食べる野菜は自分でつくって食べたいと望む方も増えてきています。しかしながら、彼らは農業をしたことがない方が多いです。したことがないというより、する機会がなかったというのが適切かもしれません。その機会を提供するのが、「通勤農業」ということです。農業に関心がある人が参加することで、農業とはどういうものなのだろうかということが理解できます。他方、農家の方々は普段農業をしていない人と交流できるので新たな刺激を得ることが出来る

農業をやりたいと思う人を長期的スパンで増やす

「通勤農業」で得た労働の対価は、米や野菜などの現物支給か、この取り組みに賛同を得たお店で使えるクーポン券と交換にします。お金では買えない価値を「通勤農業」に植え付けたからです。自分が育てた米や野菜の味を知ってほしい、農業で得たものは、簡単にお金には換算できない、という意味合いがあります。現代社会は、お金さえ払えば好きなものを自由に手に入れることが出来ます。農業は、決して楽な仕事ではありません。しかしながら、やりがいという他には代えられないものがあります。これを意図させる意味で、お金を報酬とはしたくないです。

この「通勤農業」は、現在の段階では働く大人を主に対象にしていますが、子供も実は対象にしています。「通勤農業」を地域の家族参加型イベントとすることで、将来的に農業をやりたいと思う人を長期的なスパンで増やしていくことも十分可能なのです。



明治大学『チーム二十世紀梨』

政治経済学部	4年	益田	大輔
文学部	3年	柿谷	浩平
農学部	3年	中村	朝子
政治経済学部	2年	奥村	善一

過疎化する

日南町への対応策

48パーセント。日南町の老年人口率である。この状況は、日本の30年後の姿とも言われている。

過疎化という問題に対して何ができるのか？ 事前勉強会、そして実際に日南町を訪れたことを踏まえて、私たちなりに考えてみた。

日南町内には高校がなく、町内の子どもたちは中学卒業後多くが町を出る。高校生でも町を離れ下宿することが多いという。こうして、16〜22歳の世代がこの町からはすっぽりと抜けてしまう。町に活気を生むためには、この抜けた分を呼び込む必要がある。

そのためにどうするか。私たちは、①看護・福祉分野での若者の受け入れ、②田舎体験による子どもを受け入れ、の二軸で考えた。

まず一つ目の看護・福祉分野での受け入れでは、医学生・看護学生・研修生を対象とする。私たちは日南病院の高見徹先生の講演を拝聴し、「先進地域医療」を知った。日南町では現在の日本よりも30年進んだ医療を提供しているともいえる。私たちは高齢化の進む日本において、この医療が必ず必要になると感じた。そこで、先進地域医療を先駆けて実践している地域として日南町をPRし、これから医療・看護・福祉分野で日本を担っていく若者に、実際に日南町の医療・福祉体制を見て勉強してもらおうのである。こうした研修生の受け入れは日南病院においてすでに行われているが、その規模を拡大するとともに、提携先の大学・専門学校ごとに受け入れの時期をずらすことにより、継続的に若者を町に滞在させ

学び・体験の場として若者・子どもを呼び込む



明治大学『チーム棟梁』

政治経済学部	3年	大工	峻平
経営学部	2年	坪井	聡
政治経済学部	4年	花村	恭基
国際日本学部	2年	山口	拓

ることができるとは思いません。そして二つ目の子どもを受け入れでは長期休暇中の田舎体験をメインとしてPRしていく。ホストファミリーとして子どもたちを受け入れていただける家庭を募集し、子どもたちはホームステイをする。実際に日南町の中で暮らし、自然を感じ、お年寄りや触れ合うことは、子どもにとって大変貴重な体験となる。また、この活動には町で研修中の学生たちにも協力をしていただき、町全体で盛り上げていく。夏限定ではあるが、子どもたちは日南町に元気を与えてくれるのではないだろうか。

以上のように、日南町を「学び・体験の場」としてPRすることで、町に若者・子どもを呼び込み、活気を生むことができるのではないかと考える。

注：学年は2010年9月時点のもので、※本文は、学生より提出された文章を元に構成されています。